

# 江戸時代の石工： 享保から明和の“御影屋小兵衛”

磯 辺 ゆ う

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

Mikageya, Ko-hei : An Edo-period Stonecutter  
from the 18<sup>th</sup> Century

Yu Isobe

*Naragakuen University Narabunka Women's College*

江戸時代の大坂の狛犬に名前を残している石工の中で、御影屋小兵衛は特異な狛犬を作ったことで知られている。この名前を継承する人物は複数存在するが、本稿ではその前半となる享保から明和に活躍した「御影屋小兵衛」に焦点をあてる。それは狛犬奉納大ブームの先駆けとなる時代である。既知の狛犬の他、新たに発見した石造物も含めて紹介し、同時に本稿で扱う享保から明和の「御影屋小兵衛」にも2人いることを明らかにする。

キーワード：御影屋小兵衛、石工、江戸時代、浪花狛犬、石燈籠

## 1. はじめに

江戸時代の大坂では、寛政から文化年間（11代将軍家斉の時代）にかけて狛犬奉納ブームが急速に盛り上がりほぼ頂点近くに到達する<sup>1)</sup>（年号については付表1を参照されたい）。これまで、筆者はその中で変わっているが技術力が高い多筋扇尾グループと、それを受け継ぐ和泉屋勘兵衛の狛犬について紹介してきた<sup>2,3)</sup>。今回は、それらよりも前の時代となる享保から明和の頃（8代将軍吉宗から10代家治時代）に活躍した御影屋小兵衛の石造物を紹介する。小寺慶昭氏のリスト<sup>4)</sup>（以下小寺リスト）に従うと大坂で最初に参道に出てきた石造狛犬は享保の次の元文の時代からで、本稿で取り扱う時期は、まだ狛犬奉納の「揺籃期」<sup>1)</sup>と呼ばれる頃である。一方、燈籠その他の石造物は狛犬奉納ブームに先駆けて神社境内に多数奉納されるようになっていた。揺籃期の狛犬には個性があり、作りも丁寧で、燈籠その他から狛犬へという動きが腕のたつ石工から始まっていたようである。その中に御影屋小兵衛がいる。

御影屋小兵衛の名前は、享保から文化まで知られている。奇多樓主人（昭和9年1934）<sup>5)</sup>によると「炭屋町の御影屋小兵衛（元文・宝暦）は天王寺西久保町の出身で四橋の近くに住した。寛政頃にも小兵衛の名が見えるが、これはその子孫であるかもしれぬ。」とのことである。筆者の観察からも確かに

寛政から文化に活躍した小兵衛は、明らかに明和の頃の人物と異なるとみなされるので、ここでは対象から省き、享保から明和の時代の小兵衛を紹介したい。

その時代の小兵衛の石造物としては、高槻市光専寺水盤（享保19年 1734）<sup>6)</sup>、明和の狛犬2件<sup>1,6,7,8)</sup>が知られている。上記文献（奇多樓主人）による「御影屋小兵衛（元文・宝暦）」については、それ以上の情報はない。

石造物に刻まれている文字は、基本的に石工本人のものであるという認識のもとに、狛犬の作者を推定してきた<sup>2,3,9,10)</sup>。今回も銘がある場合と無い場合について、文字を比較し御影屋小兵衛であるかどうかを判断した。文字の比較と小兵衛の狛犬を探すために、大阪府の全参道石造狛犬を網羅している小寺リスト<sup>4)</sup>中、最初の石造狛犬（元文元年 1736）から寛政末（1801）までの95%（92/97）について調査を行った（年号推定のものを含む）。特に宝暦－明和－安永（1751-1781）のものについては全て調査した（推定含む）。石燈籠については、特に注目したものだけで全体の調査は行っていない。

その結果としてここに紹介するのは、御影屋小兵衛の作として水盤1（銘あり）、狛犬2（銘あり）、石燈籠6（銘あり1件）、役の行者像を内包する宝篋印塔1件の計10件に加えて、似ているが他の石工によると判断した石燈籠4件である。この中の狛犬1、石燈籠8件が東大阪市若江鏡神社境内にある。当神社では石造物の調査（1995年）による詳細な報告資料<sup>11)</sup>が作成されており、参考とさせていただいた。

## 2. 従来から知られている作

いずれも銘があり、基準とできるものである。奉納順に記載するが、特に狛犬は今後の比較のために詳しい記載を行う。狛犬のサイズは、小寺<sup>4)</sup>に従って同資料に示されている体長59cm以下を小型、60-79cmを中型、80-99cmを大型とした。

### 2.1 光専寺水盤（図1）

<奉納年月日・台座記載銘・所在地・既出文献>

享保19年（1734）11月旦。大坂石大工 みかげや小兵衛。大阪府高槻市津之江町。天岸<sup>6)</sup>

<形態>

四角い手水鉢であり特に明瞭な特徴は見られない。中に大きな丸く整えた石がある。今は使われていない。津之江村光専寺什物で施主は当所在の鈴木牧右衛門である。この水盤から明瞭な特徴とできる文字は、年号の「享保」の「享」である。「子」の第1画部分が大きく、横棒は左側に長い。

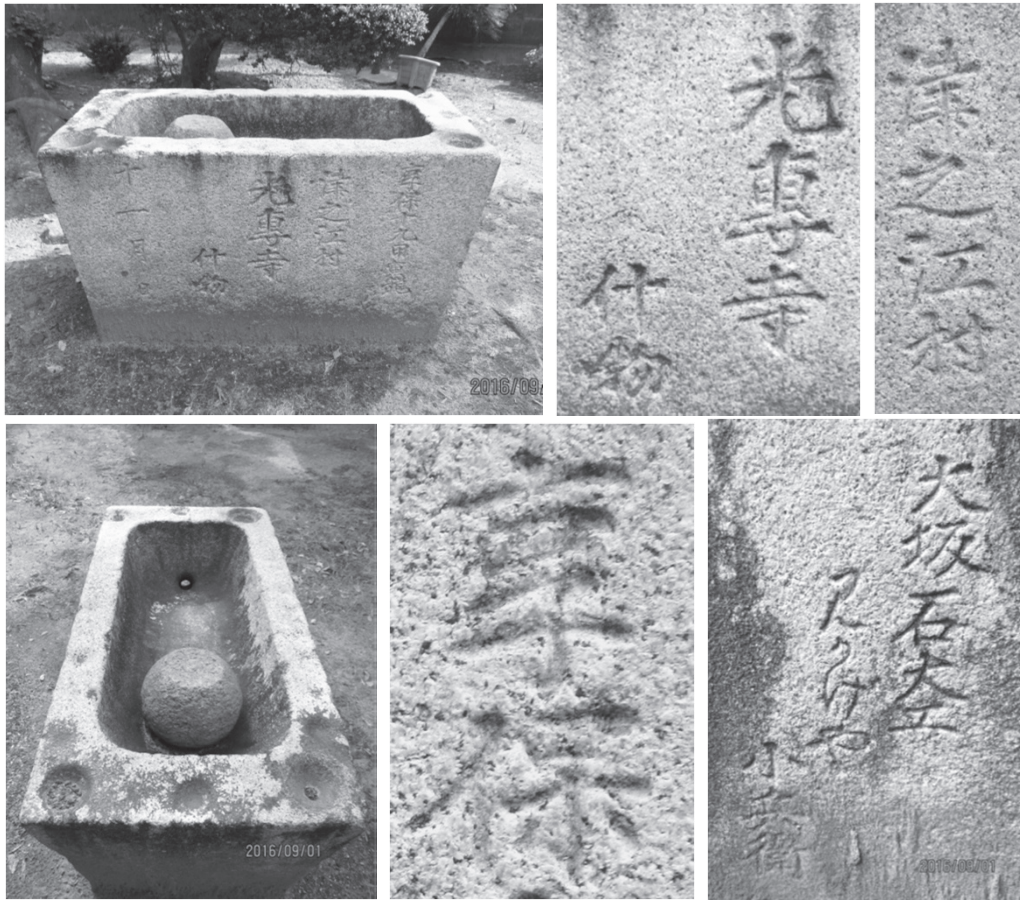


図1 光専寺水盤 享保19年 1734 11月 銘あり。

## 2.2 若江鏡神社狛犬(図2)

<奉納年月日・台座記載銘・所在地・既出文献>

明和7年(1770)正月吉日。石工大坂 みかげや小兵衛。大阪府東大阪市若江南町。奈良文化財同好会<sup>8)</sup>、小寺<sup>1,4)</sup>

<形態>

大型。砂岩。阿：雄、吽：無し。吽に明瞭な角有り。阿吽とも斜め前方を向く。胴は胸から下腹部までほぼ同じ太さ。前脚の下半はやや湾曲して自然な形であるが、上部にある丸いこぶ状の膨らみは、上腕の筋肉のように見えるが、強調されすぎてやや不自然である。この前脚上腕部分を除くと、全体に体形は自然な姿をしている。

顔は全体に平たく、大きな口で、目も大きく目頭目尻ともよく切れ、鋭い目つきである。犬歯1対。

鼻は中程度で顔の中でバランスがとれた大きさである。目つきが鋭いために怖い顔にも思えるが、口角はやや上がり気味で、幾分笑っているようにも見える。耳は、阿：垂れ耳、吽：立ち耳。

首巻き毛は、阿：右3、左3、吽：右破損、左3個。その中で顎下から左右に大きく伸びる巻き毛が特徴的であるが、これは1束ではなく2束が重なっている。顎下から来る直毛の束の奥に巻き毛が重なってある状態である。首から背中にかけての流れ毛は、短めで、顎下から背骨までの流れ毛の束の数



図2 若江鏡神社狛犬 明和7年 1770 正月 銘あり。

は、阿：首下中央1、右8、左7、吽：首下中央1、右5、左8（顎下から横に伸びている巻き毛に重なっている直毛束は含まない）。首周りの毛は巻き毛も流れ毛ともに様式化されているが豊かで自然な流れである。

尾はやや横長の平たい扇型であるが、毛は束毎に自然に上に向かって流れている。下部中央に二股の巻き毛1本あり。下部中央以外の毛束数は、阿：先端部が欠けている為に明瞭ではないが総数推定9本、その中で巻き毛は、右-無し、左-少なくとも2本でそれ以上は不明、直毛束の中には上部で交差しているものもある。吽：総数推定11、その中で巻き毛は右-1 確実、1 不明、左-4（左の1個は尾の前面にある）、直毛束の中で3本は上部で合一している。尾の横の巻き毛は、低い位置からある。尾の毛筋はなだらかに流れている。

前脚付け根にある腋巻き毛と波毛は首流れ毛の近くまで上っているが、吽の左側は阿程近くない。後脚後方に巻き毛が1個あり、尾の前縁に接しない。後脚間の股部分は彫りこまれ、丁寧な仕上げである。体全体の仕上げも丁寧である。後脚大腿部の縁に角がある。つま先は短い。

州浜に模様が彫られ、その下の台座にも竜の模様が線刻されている。

阿吽とも台座正面に「猷」だけが大きく彫られているが、この文字には勢いがあり、「犬」の点が横棒の下にあることが大きな特徴である。関係者の名前の中にある「郎」の偏と旁の高さに大きな差があることも明瞭な特徴と言える。

奉納したのは、下若江連中の西村義兵衛、岡村三郎兵衛、家又善左衛門、同七兵衛、樋口林右衛門、同弥惣兵衛、上若江連中の同じ6名である。

### 2.3 八坂神社（図3）

<奉納年月日・台座記載銘・所在地・既出文献>

明和8年（1771）9月。阿：石工大坂四橋 御影屋小兵衛、吽：石匠みかげや小兵衛。大阪市大正区三軒家東。木村<sup>7)</sup>、天岸<sup>6)</sup>、奈良文化財同好会<sup>8)</sup>、小寺<sup>1,4)</sup>。

<形態>

中型。砂岩。剥落が目立つ。吽の頭頂部破損により角の有無は不明。雌雄も破損により不明。

若江鏡神社狛犬よりやや小さく、破損が大きいのが、全体に若江鏡とよく似ている。吽の方が比較的良く残っており、少し異なる部分もあることがわかる。犬歯1対。

耳は、阿：垂れ耳、吽：破損しているがおそらく垂れ耳。顎下から横に伸びる巻き毛は、若江鏡同様に直毛と2重である。首から背骨にかけての毛束数は、巻き毛、流れ毛とも不明。

尾の毛束数は、阿：不明、吽：中央低い位置の二股の毛束無し、毛束総数9、巻き毛は高い位置で巻き明瞭なものは4個、その他は破損により不明、低い位置には無い。

前脚付け根にある腋巻き毛・波毛、後脚後方の巻き毛はほぼ若江鏡と同様と推測される。後脚間の股部分もよく彫りこまれ、後脚大腿部の縁に角がある。つま先は若江鏡よりも短く蹄状となっている。

州浜表面は破損のために模様があるか不明、その下の台座には竜の模様が線刻されている。

「難波嶋 願主 氏子中」による奉納。「猷」と「郎」の文字は無いが銘が阿吽ともにある。

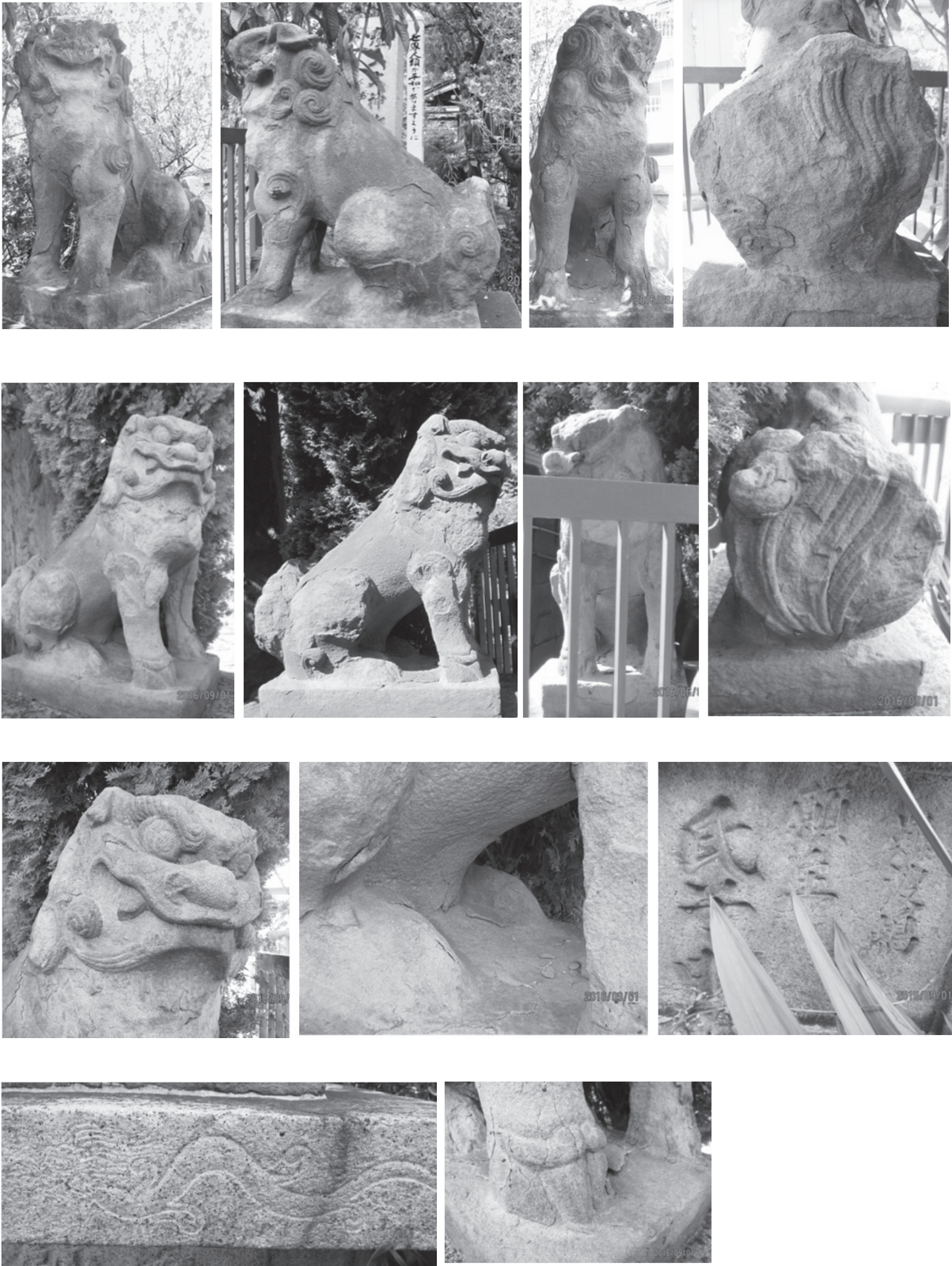


图3 大阪市大正区 八坂神社狛犬 明和8年 1771 9月 銘あり。

## 2.4 既知の石造物から見える御影屋小兵衛を示す文字と人物像

御影屋小兵衛の特徴が明瞭に表れている文字は、水盤の「享」、狛犬の「猷」と「郎」である。ただ、水盤から若江鏡狛犬まで36年の間があり、同じ名前ながら2人の人物が関係している可能性も考えられる。以下でその可能性についても検討していく。

なお、明和の2件の狛犬は、鋭い目と大きな口からなる表情、横に張り出す顎下の毛束、顎直下中央に流れ毛が1束ある、蹄のような前脚の指等、他にない独特のもので独創性がある。小寺<sup>1)</sup>は、その顔と姿から「それまでの大坂になかった獠猛な狛犬」とし、「名工の意欲作」としている。さらに若江鏡狛犬は浪速狛犬を代表する尾である団扇のような「扇尾」のほぼ始まりに近い<sup>1)</sup>のである。しかも体形、毛流れとも自然で美しい。つまり明和の時代の小兵衛は、際立って独創的で、しかも美しい狛犬を作ることができる腕があり、力強い「猷」からは力にあふれた人物であることがうかがえる。さらに2つの狛犬は、大変よく似ているものの尾の形状や耳等いくらか異なっている。作者は全く同じにはしなかったようである。

## 3. 石燈籠と宝篋印塔

若江鏡神社には、鳥居前から拝殿内側まで多数の石燈籠が並んでいる。この中の享保から明和までの間で、御影屋小兵衛の銘と特徴のある文字から、検討の要があるもの8件を選びだした。いずれも神前型（宮前型とも呼ばれる）である。石燈籠の型名は、春日大社境内の石燈籠を分類した高田<sup>12)</sup>に従った。庭園ではなく神社境内の石燈籠という点で共通するからである。

選んだ8件の中で、銘と文字から4件（図4）を御影屋小兵衛作、4件（図5）を別人と判断した。燈籠②の銘は若江鏡神社資料にも記載されておらず、今回が新発見となる。これらを奉納順に図4、5に並べた。さらに、八尾市高座神社石燈籠、同玉祖神社石燈籠、橿原市小槻町宝篋印塔も、文字からやはり小兵衛ではないかと考え、ここで比較検討する（図6）。

なお、様々な文字がある中で、「猷」が比較しやすいが、常に「猷」があるとは限らず、可能な限りの文字を活用する。

### 3.1 若江鏡神社境内にある御影屋小兵衛作の石燈籠（図4）

鳥居前に立つ大きな石燈籠①（享保18年 1733）（図4 A）には「永代常夜燈」「雨乞御禮三郷」と記されている。この燈籠の「享保」は、光専寺水盤（享保19年 1734）の「享保」（図1）と非常に良く似たものである。同境内には、他に「享」の文字をもつ石燈籠が3対と対になっていない1件があるが、このような特徴のある文字は見られない。確かに水盤と同一人物の手になるものと考えてよく、石燈籠の方が1年早い奉納となる。この燈籠は、傘のそり、竿のくびれも合わせて、安定感のある美しい燈籠である。

鳥居をくぐるとすぐの燈籠②（宝暦2年 1752 8月）（図4 C）は、基壇に「石工大坂四ツ橋 御影屋小兵衛」の銘があり、基準とできるものとなる。記されている主な文字は「奉納御神燈」である。



A 燈籠① 享保18年 1733 7月



B 燈籠⑧ 宝暦2年 1752 正月

C 燈籠② 宝暦2年 1752 8月  
銘あり



D 燈籠⑥ 明和6年 1769 7月8日



C 燈籠② 銘  
「御影屋小兵衛」

図4 若江鏡神社石燈籠 御影屋小兵衛作と判断したもの  
燈籠の番号①以下は若江鏡神社資料<sup>11)</sup>に従ったもの。以下の図でも同様。



この文字列と非常によく似ているのが、鳥居前の燈籠①から数えて7番目の燈籠⑧（宝暦2年 1752 正月）（図4 B）の「奉奇進御神燈」である。燈籠②⑧は共に宝暦2年（1752）の奉納で正月と8月である。共通する「御神燈」は間違いなく同一人物によると考えられる。特に「御」の偏に特徴がある。⑧の寄進者は「若江邑 家亦七郎左衛門」で、上記の御影屋小兵衛の銘をもつ若江鏡狛犬（図2）と同様の「郎」をもっている。ここからも御影屋小兵衛の作としてよい。②⑧共に竿のくびれている位置が高く、大変細い。この境内の中では、この二つだけの際立った特徴で、制作と設置には相当な力量が必要であろう。

鳥居前の①から数えて5番目の燈籠⑥（明和6年 1769 7月8日）（図4 D）の「猷」は明らかに若江鏡狛犬の「猷」（図2）と同じ特徴を備え、「奉猷燈」全体も深い彫りで力強い。間違いなく御影屋小兵衛のものと考えられ、狛犬の前年奉納となる。「雨乞御礼三郷」とあり、「御」の文字は宝暦の時代よりもかなり安定したものとなっている。竿のくびれの位置は高くスタイルが良いが、燈籠⑧②程細くはなく、全体にゆったりとした雰囲気である。

鳥居前の小兵衛作石燈籠①（A）とこの⑥の「雨乞御礼三郷」を比べてみると、個性の違いが感じられる。特に「乞」の左払い先端の到達点に、①では文字全体の高さの半分程度まで、②では最下部まで、という違いがある。①⑥共、左右同様である。

### 3.2 享保から明和の御影屋小兵衛は二人

水盤とよく似た「享和」をもつ燈籠①（享保18年 1733）は、当神社最大で（神社資料<sup>11)</sup>によると306cm。ちなみに第2位は上記燈籠⑥ 286cm)、安定感のある、すっきりした形の燈籠である。鳥居前に置かれており相当に腕のある人に依頼したものであることが想像される。

それから19年後の宝暦2年（1752）に奉納された⑧と②は竿のくびれ部分の位置が高く大変細い。次の図5と比べるとわかりやすいが、他のものはこれほど細くなく、位置も低い。これは作者がかなり意識的にスタイリッシュな燈籠を目指して、腕を見せたと考えて良いだろう。

①では形も文字も安定感のあるものであるのに対し、②⑧では形が先鋭的であるのに比して文字はやや自信なさそうである。つまり①は円熟した人、②⑧は若くて気負いのある人と考えることができる。19年の間隔から、燈籠①（享保18年 1733）と水盤（享保19年 1734）は先代の御影屋小兵衛、②⑧（共に宝暦2年 1752）は次世代の御影屋小兵衛と考えられる。

そして宝暦ではまだ若かった次世代の小兵衛は、明和に至って他にない力を発揮するようになる。その表れが若江鏡狛犬（明和7年 1770）であり、その前年に奉納された燈籠⑥である。これらの「燈」の文字は力強く勢いがあり、自信に満ちている。

最も活躍したと思える時代をとって、先代を小兵衛（享保）とし、次世代を小兵衛（明和）としたい。

### 3.3 若江鏡神社境内の中で、要検討の文字を持つが、他の人によると判断した燈籠（図5）

最初に注目されるのは、燈籠⑫（寛保元年 1741）（図5 B）の「猷」である。「犬」の点が横棒の下にあり、御影屋小兵衛かと思わせる。奉納年が先代と次世代の間で共に可能である。この⑫と文字列の全体像が良く似た感じのものが同境内中に合計4件見つかри、奉納順に図5に配列した。



A 燈籠⑤ 享保17年 1732 正月

B 燈籠⑫ 寛保元年 1741 初秋



C 燈籠③ 延享年 4年 1747 2月

D 燈籠④ 宝暦6年 1756 2月

図5 若江鏡神社石燈籠 他の石工作と判断したもの

これらの燈籠は互いに良く似た形をしている。傘が丸味をもち、四隅のそりが小さい。竿の上下の幅の差が少なく、くびれの位置はそれぞれ異なるが、全体にやや低い位置にある。

文字を比較すると、上記燈籠⑫と大変よく似た雰囲気のある文字列をもっているのが燈籠⑤（享保17年1732）（図5 A）である。「御」と「奉」がよく似ており、特に「御」の扁の左への払い方がそっくりである。これらの文字から⑤と⑫は同一人物のものと考えられる。さらに⑤の「享保」を見ると、翌年奉納の小兵衛（享保）による燈籠①の「享保」と異なっている。1年間でここまで変化することは考えにくいので、燈籠⑤さらに⑫は小兵衛（享保）のものではないと判断できる。

燈籠⑫の「奉」と「御」を小兵衛（明和）の若い頃（図4 B C）と比べても「御」の扁の左への払いに相違がある。小兵衛（明和）の扁の左払いが先でやや開いて湾曲しているのに対し、⑤⑫の場合二本とも直で並行である。さらに小兵衛（明和）ではやや右上がりになる傾向がみられる。

以上により、燈籠⑫は小兵衛のどちらでもないと考えられる。すると「犬」の点が横棒より下に来る「猷」を書く石工が、それほど大きく異ならない時期に別に行ったことになる。「猷」の特徴を見る時、単に点の位置だけではなく、文字の力やその他の特徴も含めて判断する必要があることになる。この

「猷」については項を改めて4で述べる。

燈籠⑫よりも後の③と④も、よく似た文字列を持っているように見え、判断が難しい。燈籠③(延享4年 1747)は、文字の一つずつを見ていると小兵衛(明和)の一番若い頃とも、燈籠⑤⑫の人物の円熟した頃とも言えなくもない。しかし文字列全体の印象から考えると、どちらとも異なる人物と見たい。この③に良く似ているのが燈籠④(宝暦6年 1756)で、時期的に小兵衛(明和)の若い頃(燈籠⑧②)と重なってくるが、これも小兵衛(明和)の文字列とは異なると見てよい。特に「御」が同じとは言い難い。一見似たように見える③と④が同じ人物かどうかは保留とする。

以上のように良く似た感じの文字列があるが、判断にはかなりの注意が必要となってくる。

### 3.4 その他の神社の石燈籠、道路脇の宝篋印塔(図6、図7)

若江鏡神社以外で御影屋小兵衛のものと判断した明和のものが3件ある。奉納順に、八尾市高座神社二月堂型燈籠(明和元年 1764)、奈良県橿原市小槻町宝篋印塔(明和2年 1765)、八尾市玉祖神社石燈籠(明和4年 1767)である。宝篋印塔は、丹波佐吉関連で3つのブログ<sup>13,14,15)</sup>に写真が出ている。

いずれも勢いのある、力強い文字をもっている。左への勢いが印象的で、同時に右肩上がりの特徴が見られ、特に明和元年(1764)と2年(1765)の頃に顕著である。

この3件の中で、特徴のある「郎」をもつのが橿原市小槻町道路脇の宝篋印塔(明和2年 1765)(後ほど詳述)と玉祖神社石燈籠(明和4年 1767)である。明らかに御影屋小兵衛(明和)と考えられる。いずれも若江鏡燈籠⑥(明和6年 1769)と若江鏡狛犬(明和7年 1770)の少し前である。玉祖神社石燈籠は、形の上では特別なものではないが、この「永代常夜燈」は先代の小兵衛(享保)の若江鏡燈籠①によく似てきている。

高座神社二月堂型燈籠(明和元年 1764)(図6A)は、「郎」も「猷」ももたない。しかしその文字列の勢いと右肩上がりの様子は次の小槻町宝篋印塔と共通するものである。

これらに共通する年号「明和」を比べるために、上述した明和の作全部について年代順に並べてみた(図7)。高座神社から若江鏡狛犬まで確かに同様の特徴を備えており、同一人物によるものであることがわかる。「明」の「月」の左払いが長めなことが特徴である。八坂神社狛犬(図7F)の場合、「和」のはねが大きいことや「月」の幅が少し広がっているなどやや異なる部分もあるが、全体の印象は同様である。この一連の「明和」の中で最も力の余裕が感じられるのが、明和2年の宝篋印塔である。

その前年、明和元年(1764)の高座神社二月堂型燈籠は、隅々まで作りが丁寧で端正な美しさをもっている(図6)。作者の技量の高さをうかがわせるものである。この「永代常夜燈」も先代の若江鏡燈籠①に似てきている。翌年の宝篋印塔と続いて、この頃が油が乗り最高の腕を見せていたときではないかと思われる。



A 高座神社 二月堂型燈籠 明和元年 1764



B 檀原市小槻町 宝篋印塔 明和2年 1765



C 玉祖神社燈籠 明和4年 1767

図6 その他の石燈籠と宝篋印塔 御影屋小兵衛作と判断したもの

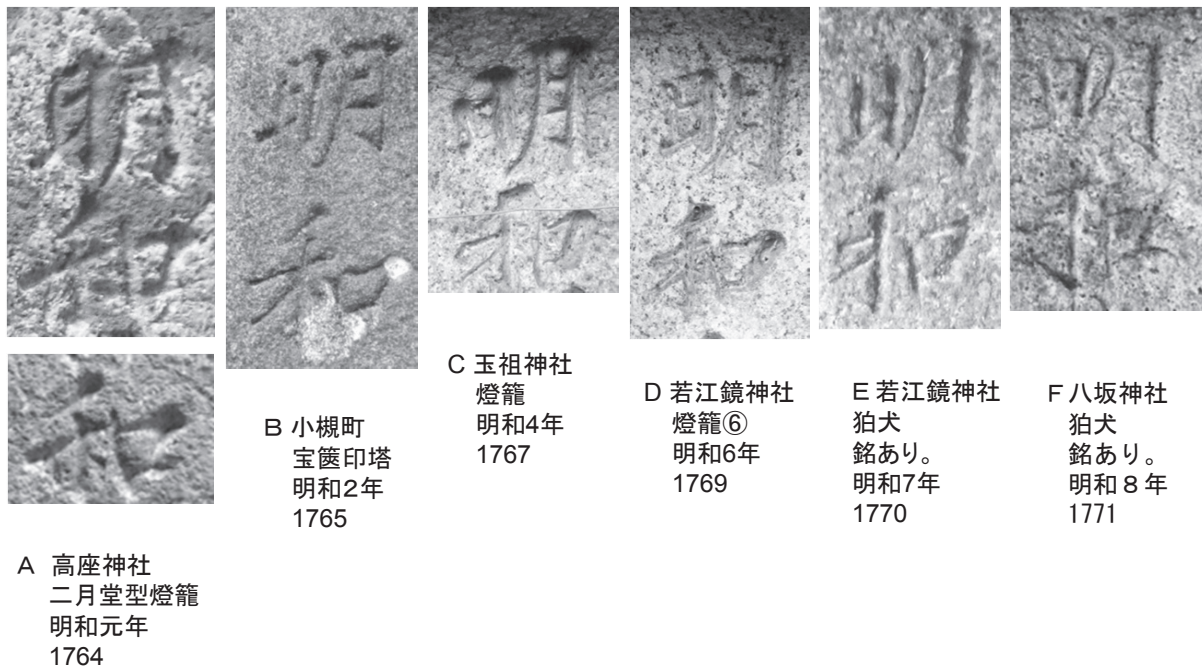


図7 御影屋小兵衛作と考えられる「明和」

### 3.5 小槻町宝篋印塔（明和2年）（図7、8）

<奉納年月日・台座記載銘・所在地・既出文献>

明和2年（1765）。銘無し。奈良県橿原市小槻町。狛犬屋オヤジのブログ<sup>13)</sup>、石仏の辻<sup>14)</sup>、coma-たんさく人<sup>15)</sup>

上の九輪部分は後補である（図7）。砂岩、恐らく和泉砂岩でできており、くりぬいて中に役の行者像が内包されている。正面に「大峰山上」「願主 飯高村小先弥太郎、多村小先藤七」とあり、関係者多数の名前が下に彫られている。勢いに満ちた文字であり、特に左への払いの力を感じさせる。

これは両村の大峰山上講による寄進であり、講の世話人でありリーダーであると考えられる「小先」つまり小先達の二人が願主となっている。「江戸の旅文化」<sup>16)</sup>によると、元講に大先達があり、その枝講（ここでは各村の講）では小先達が世話をするようである。このときの大峰参りが成功したからなのか、願いを込めてのことなのかは不明であるが、いずれにしても立派な宝篋印塔の建立である。大峰山との関連からか内部に役の行者像が入れられている。

役の行者像は、足は破損しているが、隅々まで丁寧である。これは塔からは独立しているが、内部にきっちりと納められている。正面の「大峰山上」その他の記述から考えても、最初からこのような構造だったと考えて良いのではないだろうか。そして何よりも大きな特徴はその伸びやかな笑顔である。

錫杖が透かし彫りになっていることや、彫りの美しさのために上記ブログでは、この像を丹波佐吉の作であろうという意見が出ている。つまり宝篋印塔建立から約100年後のこととなる。しかし、今まで見てきたように御影屋小兵衛は非力ではない。特に明和の初め頃最高の力を発揮していた。佐吉の顔に伸びやかという要素は少なく、今のところこの笑顔は素直に小兵衛のものと考えたい。今後、江戸時代

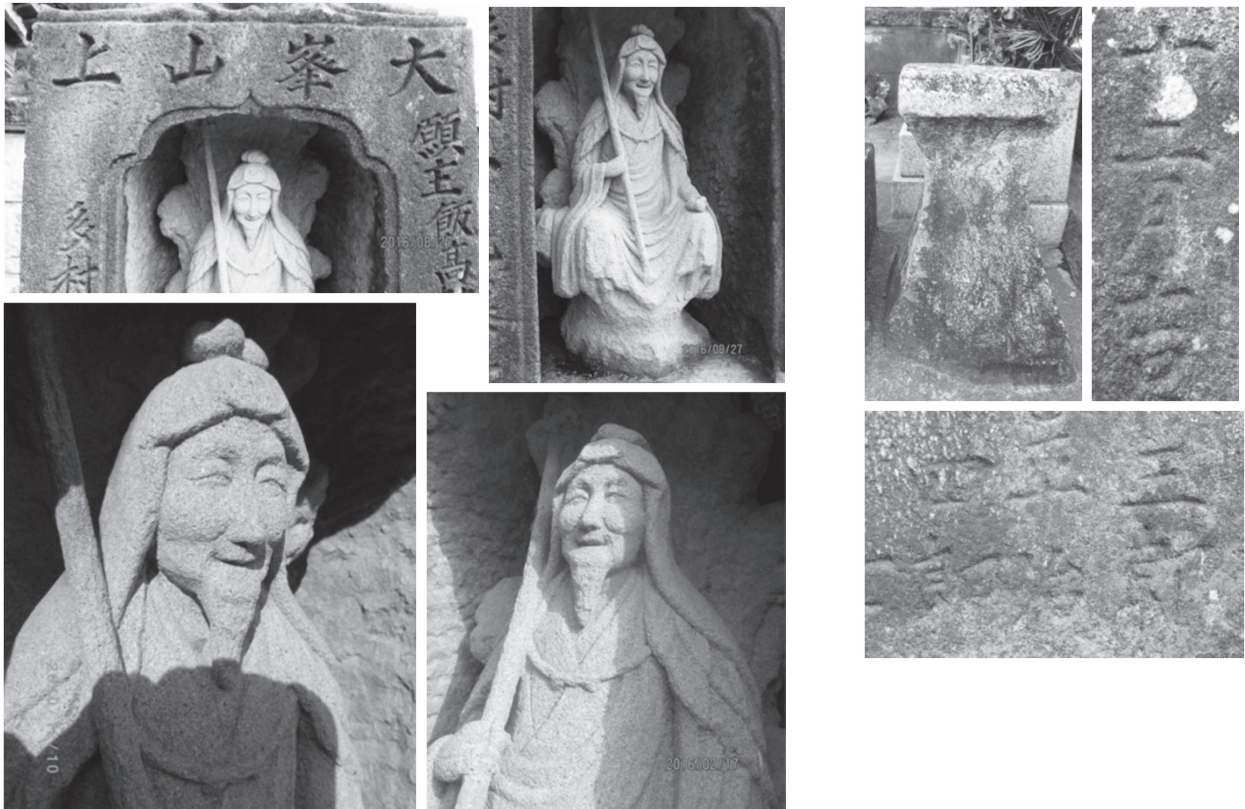


図8 小槻町 役の行者 明和2年 1765 (左)  
 その前にある石燈籠の竿らしいもの (右) 寛政8年 1796 12月

における役の行者像の変遷や本像の石材等、異なる角度からの研究を待ちたい。

なお、この塔の前には、「大峰山上三拾三度」を記念した道標が立っている。明治24年9月の建立で、施主は當大字の岡村彌三郎である。この道標と宝篋印塔との間にも寛政8年（1796）12月建立の「大峰山上」と記された神前型石燈籠の竿らしいものがコンクリート床に固定されており、小槻村の5人の名前が見える。大峰山参りの講が長く続いているのであろう。ここに書かれている文字を拾ってみたところ、小兵衛（明和）の「月」と「郎」に良く似た文字が見つかった（図8）。他の人によるものと想定することもできるが、全体の印象は小兵衛（明和）のようにも見える。もしもそうなら、寛政期に名前を残している御影屋小兵衛に家督を譲った小兵衛（明和）の老年期の作ということになる。若江鏡燈籠奉納の宝暦2年（1752）に例えば20歳であったとすると、この寛政8年（1796）には64歳ということになる。石燈籠（恐らく）自体は店の職人が作って、文字だけを彫ったとか、文字だけを書いた等、この仕事への参画の仕方は様々に推測できる。ちなみに寛政期の御影屋小兵衛の文字は異なるものである（磯辺 未発表）。

御影屋小兵衛（明和）と小槻村の人々との関係は分からないが、相当に深いものがあったのかもしれない。

#### 4. 「犬」の点が横棒の下にある「献」をもつ石造狛犬

若江鏡神社境内の燈籠から、「献」の「犬」の点が横棒のはっきり下にあるという特徴は、御影屋小兵衛（明和）だけではなく、さらに一人いるらしいことがわかった。それは寛保元年（1741）のもので、二人の御影屋小兵衛の中間的な世代と推察できる。

この特徴を持つ文字を石造狛犬で探してみた（表1）。大阪府参道石造狛犬を全数調査した小寺リスト<sup>4)</sup>中の狛犬を再調査した結果である。青銅狛犬は省いている。

同リスト中で最初の参道石造狛犬（元文元年 1736）から天明末（1789）までの51件（推定含む）の中で、確認された奉献は10である（献のみを含む）。この頃は「奉献」「奉納」を狛犬台座その他に入れることが比較的少なかった中での奉献10中、点のはっきりと下のものは2件である。それは若江鏡神社狛犬（明和7年 1770）と八尾市恩智神社（奉納年不明、推定明和）のほぼ明和の頃のものである。次の寛政では奉献・奉納無しが減少して、奉献や奉納を入れることが流行し始める。奉納の増加が著しいが、奉献も14あり、その中で点の下のは寛政2年（1790）の味府神社（摂津市）1件である。さらにこの表に含まれていない、つまり参道に出ていない狛犬に同様な奉献が1件存在する。寛政9年（1797）の鴨高田神社（東大阪市）である。

表1 大阪府参道石造狛犬にある「奉献・奉納」の状況

時代	元文—天明 1736-1789	寛政 1789-1801
未確認・確認不可		
未調査	4	1
狛犬・台座とも無し	1	1
台座無し	2	0
確認済（狛犬・台座ともにある。）		
奉献・奉納無し	32	17
奉納	2	12
.....		
点上	7	11
点下	2	1
奉献 点ほぼ横やや上	0	1
点ほぼ横やや下	1	0
点不明	0	1
合計	51	45

合計は小寺氏リスト<sup>4)</sup>にあがっている石造狛犬の数である。

点が下の「献」をもつ狛犬の中で、若江鏡と時期的に近いものとして1件、恩智（推定明和）があがってきた。表1からわかるように、このような「献」を書く石工は多くない。この時期小兵衛（明和）の他にもう1人、彼よりやや年長かと思われる上記若江鏡神社燈籠⑫を作った人物がいた。しかし、恩智神社狛犬の「奉献」は、この人の「奉献」やその他の文字列とは異なる印象を受ける。どちらかと言えば、小兵衛（明和）の方に近いのである。しかも、恩智神社は八尾市内信貴山麓にあり、上記御影屋小兵衛の燈籠（高座神社、玉祖神社）の所在地に連なる所である。

このように恩智神社の狛犬は、小兵衛（明和）の作かとも考えられるが、判断しにくい。「奉献」の文字は同じとも異なるとも言い難い。恩智神社狛犬の「奉献」が小さい文字であり、比較しにくいことが大きな原因である。丹波佐吉の場合でも言えるが、大きい文字の場合と小さい文字の場合では印象が異なってくるのである。さらに恩智神社の狛犬には、もっと大きな文字がなく、奉納者の小さなわかりにくい文字があるばかりで、比較が困難である。狛犬そのものは、若江鏡と顔つきが異なり、細部もかなり異なっている。しかし、骨組みの確かな生き生きとした狛犬で、若江鏡よりも一層自然で様式化さ

れていない。本稿では、今のところ恩智神社狛犬の作者については保留としておく。だが、この狛犬は非常な出来栄で、この時代にここまでできた石工とは誰だろうと、驚きと疑問がわいてくる。

味府（寛政2年 1790）と鴨高田（寛政9年 1797）は、老年期の小兵衛（明和）も健在であった可能性のある時期だが、その「奉獻」は明らかに小兵衛（明和）とは異なり、別人物であると判断できる。

## 5. 御影屋小兵衛

享保から明和にかけて活躍した御影屋小兵衛は、先代小兵衛（享保）と次代小兵衛（明和）の二人が存在する事が明らかになった。先代の作は今のところここに示した2件だけがはっきりとわかっているものとなる。中でも、若江鏡神社鳥居前の石燈籠からは相当な腕がある石工であったことがうかがえる。しかし、先代は狛犬を残していない。この頃、大坂ではまだ石の狛犬は奉納されていないことによるのであろう。燈籠その他の石造物奉納の時代に生きた人である。

その後を継いだ次代小兵衛は、若い頃から独創性を追求し、先鋭的なものを作ろうとしていたことが若江鏡神社境内の石燈籠から見えてくる。宝暦の頃はまだ若さが前面に出たものであったが、明和になると、バランスがとれた美しいフォルムのものを作っており、この時代のトップクラスになっていたと想像できる。小兵衛（明和）の銘には、大坂四ツ橋とあり、大坂の当時の石屋浜<sup>8)</sup>のほぼ中心地にいることになる。

石の参道狛犬は、元文元年に住吉大社に奉納されて以降、少しずつ奉納されるようになり、明和になると増加してきていた<sup>1,2)</sup>。元文から明和までの石造狛犬の中で石工名が彫られている割合は小寺リスト<sup>4)</sup>によって数えると、42%（13/31）と高く、11人の名前があがっている。その中で2件に名を残しているのは最初の参道石像狛犬を作った男里屋市兵衛と御影屋小兵衛の2名で、他は皆1件だけである。この結果からみても、明和の代までのところでは、石工界で名を残すような人たちが狛犬分野にこぞって参入してきた時代といえるだろう。御影屋小兵衛（明和）はその一人だったのである。しかもその狛犬は特異なもので、顔と姿、尾に独自性を大きく発揮している。奈良文化財同好会<sup>8)</sup>は、「独創性と高い精神性」と称えている。

一方、大坂で狛犬奉納のピークに近づく文化年間において石工銘がある割合は26%（27/105）と低くなり、名前は18人（その中で複数作っているのは6人、中でも御影屋新三郎は4件）である。奉納数が増すにつれ、銘の入らないものが増え、その一方で人気が高い人は複数作るようになっているのである。そして狛犬は様式化が進んでくる。



## 6. おわりに

銘がない場合も、文字を比べることで、石工を特定する事がいくらか可能である。今後さらに整理ができてくると、それぞれの石工の作が明確になり、比較検討が深まる可能性がある。燈籠、水盤、鳥居等の石造物はほぼ良く似た形をしているが、狛犬は複雑な形をしているために、個性が他の石造物よりも出やすく、さらに文字を見ることで、石工たちの性格や腕に近づくことができそうである。江戸時代の狛犬が今も残って、それぞれの神社及び氏子中の人々によって大切にされていることに感謝したい。

大阪府の狛犬を知るにあたって、小寺慶昭氏の全面調査資料（2003）（小寺リスト）<sup>4)</sup>には大いに助けられている。貴重な史料であることを記し感謝にかえたい。またそれに先立ち、大阪府の狛犬については、木村茂氏（1970）<sup>7)</sup>、奈良文化財同好会（1999）<sup>8)</sup>の方々の労作があり、研究の貴重な足がかりとなっている。訪ねて行くと中には失われていて、もう会えない狛犬もいることがわかる。記録としての価値も高いのである。

また、小槻町宝篋印塔について最初に教えていただいた杉本佳代子氏と多くの重要な御教示をいただいた亀山幸治氏、貴重な資料をいただいた若江鏡神社の宮司さんに深く感謝する。

### 引用文献

- 1) 小寺慶昭（2003）大阪狛犬の謎. 276pp. ナカニシヤ出版.
- 2) 磯辺ゆう（2014）斑鳩町龍田神社狛犬と多筋扇尾—江戸時代浪花狛犬の1グループ—. 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要45：39-62.
- 3) 磯辺ゆう（2015）多筋扇尾を受け継ぐ狛犬—和泉屋勘兵衛—. 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要46：39-62.
- 4) 小寺慶昭（2003）大阪府の参道狛犬 参道狛犬調査報告書1. 108pp.
- 5) 奇多樓主人（1934）徳川期に於ける大坂の石屋. 郷土研究 上方 第38号：48-50.（上方刊行会 1970 郷土研究 上方 復刻版4 152-154 新和出版社 所収）
- 6) 天岸正男（1979）大坂三郷の石工 歴史考古学 第3号：15-27. 歴史考古学研究会.
- 7) 木村茂（1970）大阪近郊の石製狛犬の研究（第1報）—年代不明の狛犬について—. 大阪教育大学紀要19：第I部門 163-180.
- 8) 奈良文化財同好会（1999）狛犬の研究—大阪府の狛犬—. 165pp. 奈良文化財同好会.
- 9) 磯辺ゆう（2007）丹波佐吉の狛犬1—記載. 奈良文化女子短期大学紀要38：19-30.
- 10) 磯辺ゆう（2007）丹波佐吉の狛犬2—考察. 奈良文化女子短期大学紀要38：31-42.
- 11) 若江鏡神社石造物資料（1995）自作資料.
- 12) 高田十郎編（1928）春日乃石燈籠 其一. なら第48号、春日乃石燈籠 二. なら第49号、（1929）春日の石燈籠 三. なら第50号.（喜多野徳俊著 1995 春日の神の石燈籠. 292pp. 近代文藝社. 所収）
- 13) 狛犬屋オヤジのブログ（2010, 5, 17）丹波佐吉.  
<http://blogs.yahoo.co.jp/tastumi228400/folder/941573.html>
- 14) 石仏の辻（2010, 11, 23）橿原市小槻町の佐吉. <http://sekibutuwalk.blog99.fc2.com/blog-entry-102.html>
- 15) Coma-たんさく人（2013, 12, 25）丹波佐吉雑考.  
<http://www.geocities.jp/kambt2d5g3k4/427n-gyoujaazou.html>
- 16) 神崎宣武（2004）江戸の旅文化. 岩波新書884 253pp. 岩波書店.

付表1 江戸時代年号

年号	西暦年	改元年月日	備考
慶長	1596-1615	慶長20年7月13日	慶長8年 初代家康、慶長10年 2代秀忠
元和	1615-1624	元和10年2月30日	元和9年 3代家光
寛永	1624-1644	寛永21年12月16日	(グレゴリオ暦では1645年1月13日)
正保	1644-1648	正保5年2月15日	
慶安	1648-1652	慶安5年9月18日	慶安4年 4代家綱
承応	1652-1655	承応4年4月13日	
明暦	1655-1658	明暦4年7月23日	
万治	1658-1661	万治4年4月25日	
寛文	1661-1673	寛文13年9月21日	
延宝	1673-1681	延宝9年9月29日	延宝8年 5代綱吉
天和	1681-1684	天和4年2月21日	
貞享	1684-1688	貞享5年9月30日	
元禄	1688-1704	元禄17年3月13日	
宝永	1704-1711	宝永8年4月25日	宝永6年 6代家宣
正徳	1711-1716	正徳6年6月22日	正徳3年 7代家継
享保	1716-1736	享保21年4月28日	享保元年 8代吉宗
元文	1736-1741	元文6年2月27日	
寛保	1741-1744	寛保4年2月21日	
延享	1744-1748	延享5年7月12日	延享2年 9代家重
寛延	1748-1751	寛延4年10月27日	
宝暦	1751-1764	宝暦14年6月2日	宝暦10年 10代家治
明和	1764-1772	明和9年11月16日	
安永	1772-1781	安永10年4月2日	
天明	1781-1789	天明9年1月25日	天明6年 11代家斉
寛政	1789-1801	寛政13年2月5日	
享和	1801-1804	享和4年2月11日	
文化	1804-1818	文化15年4月22日	
文政	1818-1830	文政13年12月10日	(グレゴリオ暦では1831年1月23日)
天保	1830-1844	天保15年12月2日	(グレゴリオ暦では1845年1月9日) 天保8年 12代家慶
弘化	1844-1848	弘化5年2月28日	
嘉永	1848-1854	嘉永7年11月27日	(グレゴリオ暦では1855年1月15日) 嘉永6年 13代家定
安政	1854-1860	安政7年3月18日	安政5年 14代家茂
万延	1860-1861	万延2年2月19日	
文久	1861-1864	文久4年2月20日	
元治	1864-1865	元治2年4月7日	
慶応	1865-1868	慶応4年9月8日	慶応2年 15代慶喜 慶応3年大政奉還
明治	1868-		

以下を参考にして作成した。

江戸時代暦／西暦旧暦対照表(年号・干支付き) @夏貸文庫歴史02

[www.natubunko.net/rekishi02.html](http://www.natubunko.net/rekishi02.html)

徳川将軍一覧 Wikipedia

元号一覧 Wikipedia